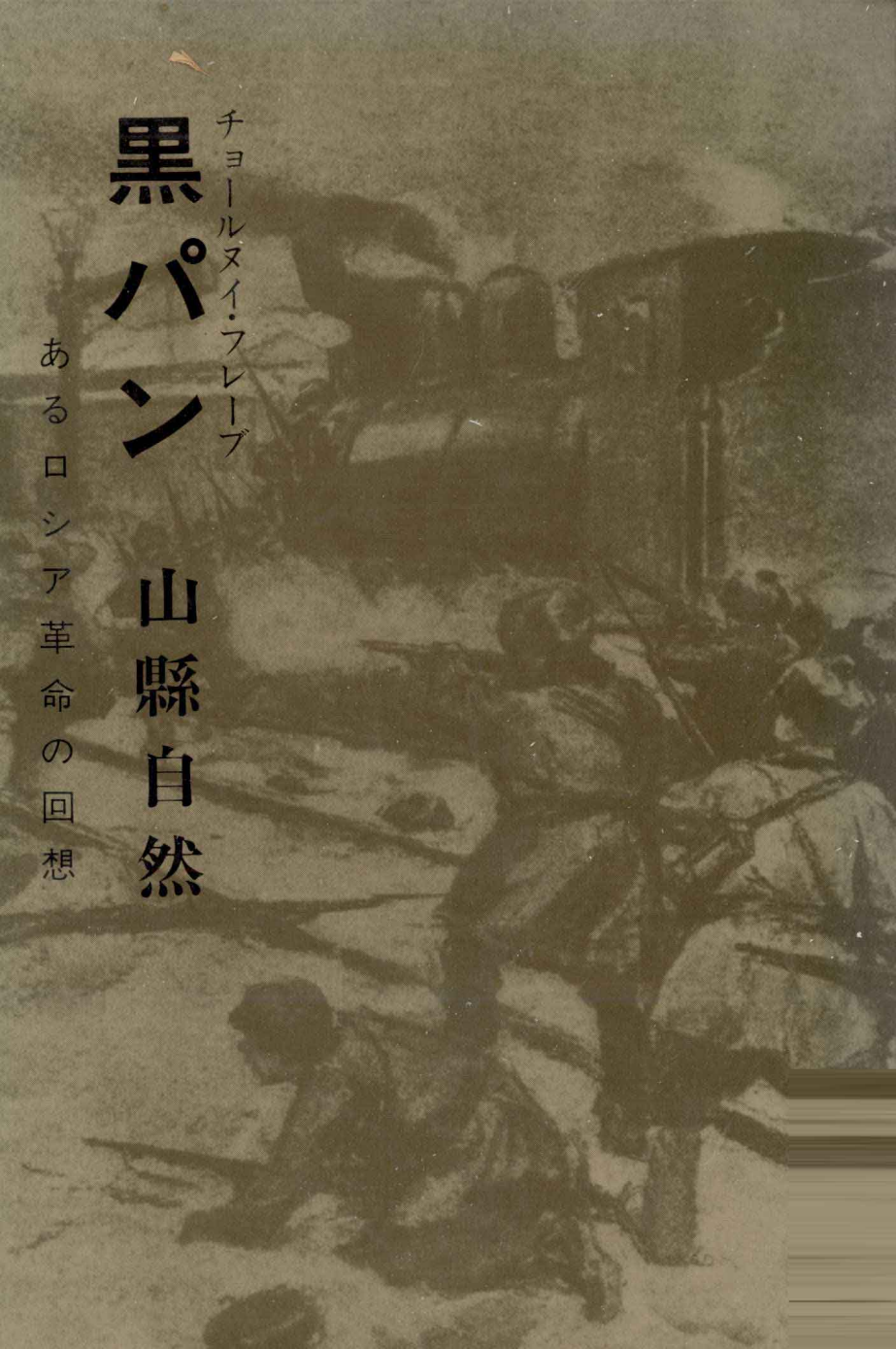

黒パン

チョールヌイ・フレーブ

あるロシア革命の回想

山縣自然

黒パン

チョールヌイ・フレーブ

あるロシア革命の回想

山縣自然（ヤマガタ・ジネン）

題字も著者

チョールヌイ・フレーブ
黒パン
一九八三年八月一五日　発行
定価　一八〇〇円
著者　山縣自然
発行者　加藤宣幸
発行所　株式会社　新時代社
東京都千代田区神田神保町二―二
電話　東京　二三四―〇一三一
振替　東京　〇―一三五八一
ISBN4-7874-9017-6 C0095 ¥1800E

父、山縣自然と『黒パン』

我が父、山縣高七（自然）は、ロシヤ革命を目撃し得た数少い日本人の一人であった。

青年時代、自らその経歴を書く。

「山縣高七　山口県熊毛郡阿月村の産　自ら自然と号す。幼少の折は郷里の小学校に学び　次に大阪府立天王寺中学校に入り　大正五年同校卒の後　単独にて鮮満シベリヤの旅に上り　半歳近くにして帰国。翌年二月露語研究の目的にて入露　モスコーを経てペトログラードに至る。途中にてロシヤ大革命の勃発を見る。爾来年を越えて二月末各国大使館引揚と共に帰朝するに至る。約一ヶ年間彼地に存って全くロシヤ人同様悉に革命の辛酸を嘗めたり。想うに今日彼の混沌たる性格　情操　人生観も恐らく此の時の生活の裏にて最もよく涵養されたるものならん。帰朝の年東洋大学に入り　これより二年間専心哲学の研究に没頭す。後同大学を去るに及び　一露国貴婦人アンナ・ヅミトリーエヴナ・ブブノワ女史に師事して専らロシヤ文学を研

究　一ヶ年にして同女史の門を辞す。此の方面にては小説ヅブロフスキーの訳本を刊行し、又両三回専門の文学雑誌に翻訳を発表したることあり。」

草稿の表紙には唯〝黒パン（チョールヌイ・フレーブ）〟とのみあり、A・トルストイが内戦の同時代を描いた長編に『パン（ホレブ）』と題した様に、その語にはロシヤ革命を体験した者のみ知る何か特別な響があるのかも知れない。併記された〝あるロシヤ革命の回想〟とは私の意志で副題とした。

脱稿した時日は表紙にも末尾にも記されていないが、一九一八年（大正七年）革命により帰国後、在京中書留め、プーシキンの翻訳刊行、一九二一年（大正十年）前後までに、著者二〇才から二三才頃の間に　出版の意志を持って書かれたと思われる。

しかし〝黒パン〟は当時何らかの理由で出版に至らず、プーシキンの『ヅブロフスキー』の翻訳出版、アルツィバーシェフの短編の翻訳を文学誌に発表等の後、父はロシヤ文学の道を捨て、大阪の兄達と会社を共に経営する事になる。後、その理由を自ら「大正十二年一実兄の死去を一転機として現存の家業に拘る」と後記している。

結婚（昭和三年）長子出生（昭和五年）昭和初期の市井の幸福な生活。――しかし日支事変から第

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

二次大戦へと暗雲が世界を覆う。
やがて戦火が国土にまで及ぶ。欧州の戦局の終り、日本の敗戦がその目前にあった昭和二〇年五月、脳出血による突然の死が父を襲う。

戦時困難となった事業に対する日々の苦闘がその原因であった。行年四十九才。
父の蔵書中、プーシキンの〝アキレスの如く　戦さなかに斃れたる者に幸あれ〟に傍線が引かれてあった。

嵐が去り、平和が甦った時、戦火を避けて疎開されて居た父の蔵書が、主なき書斎に還って来た。父が自身で箱詰めした蔵書の間に茶色になったハトロン紙に包まれた此の〝黒パン〟の草稿があった。
吾が子にも語る事少なかった、父のロシヤ遊学中の事を初めて知ったのは此の時であり、その時からさえ三十五年は経た。

〝黒パン〟が上梓される時、その一冊を父の霊前の次に、我が母の霊前にもそっと奉げよう。

死の数ヶ月前、父は庭で古い書簡や原稿等を焼却し、その時、此の草稿も自ら火中に投じようとし

た。それを押止めたのは母であるから……。

母の突差の行動で、永久に消去る事なく今日まで守り得た草稿は、書かれてから六十年の時の流れの移り香を漂わせ、その香りは幼い日、父の背に眠った時のぬくもりの記憶とも重なる。

最后に、新時代社清水良一編集長始め新時代社の人々、早大文学部佐々木寛助手、そして我が子早大生山縣長谷雄に深い感謝の念を。

一九八三年七月

山縣真澄

黒パン

チョルダイ・ブレーブ

黒パン

チェルネイ・フレーブ

目次

序

第一篇　クレストフスキー島に居た頃

晩春、初夏の陽光……15

我が青春のペトログラード……17

ジーナのこと……31

ナタリナ・ニコライナのこと……34

菜食料理店にて……41
ニチェオー……58
ジーナ駈落のこと……68
新緑……70
白夜のころ……72
白樺の森……75
エラーギン島にて……79
気紛れのままに……81
ネバ河の舟遊び……86
青年士官とイワン……94
渾沌の露都……97

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

フェデンコ氏宅のこと……103
露都の日本軍人たち……107
墓原にて……113
KとYの帰国……115

第二篇　ボリシャーヤ・ラズノチェンナヤに居た頃

夏から秋の憂悶

125
コロリコフ将軍とその妻……127
七月擾乱……132
生の苦悩……145
ペトロパウロスキー尖塔……153

ペッロフスキー島にて……158
哥薩克兵の葬儀……161
尻太の兵隊さん……164
郊外にて……167
誕生日のこと……170
窓外の光景……172
転居のこと……176
フショー・ラウノー……182

第三篇　ヴェデンスカヤ町に移ってから

厳冬の擾乱

ペッホフ氏の宅……187
海辺の村にて……199
露貨大暴落……203
十一月革命の晩……207
ボリシェヴィキーの革命……216
擾乱の街の舞踏会……225
有為転変上下顚倒……232
盗難にあう……236
ルーマニア人父娘のことなど……244
冬のペトログラードの出来事……250
雪の夜の散歩……256

創政会の日……258
総引揚げ……266

結末

口絵ページ及び本文中の注は、作品の背景を語るべく新時代社編集部に於て作製しました。

序

バイロンが曾て見ぬ国の事を書くなと云って我々を戒めてゐる。見た者と見ぬ者とは違ふ。

此の一巻は革命露都一年間の生活の記録である。あの革命が世界歴史上未曾有の大事件である限り、此の記録の中には確に貴い物があるには相違ない。いや、斯ふ云ふのは私としては好ましくない、此の発表形式を用ひたのも、実は革命の真相を最も如実に物語らんとする目的に外ならなかったのだ。散漫で乱雑かも知れないが、而も革命の都の種々相である。余りに多方面を書かんとして、却って何物も書き得なかったとしたら、とりも直さず、自分の愚劣さを証するものである。ともあれ、押しなべて見渡せば、混沌の世界であった。而もその中から何物かを掴まうとなし、遂に自ら混沌と成了せた観のあるのは聊か面白い。

素よりこれ数年前の記録である、反古となすには余りに惜しい気がしたので、遂に世に出すことにした。私の幼稚と浅学から拙文や駄説や無意味に近い冗漫も有るであらうが、それは止むを得ない。

初め一々見出しを設けてゐたが、中途で面倒臭くなって、之を止めた。添削もその通り、すれば際限なく、よし悪しとも考えたから、いい加減の程度に停めて置いた。一年の間に三度居を移したことがあって、全体を分ちて三篇となした。

著者

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c